発行所：公益財団法人 北野生涯教育振興会
ＵＲＬ：https://www.kitanozaidan.or.jp/

生涯教育だより

2023
夏
季刊 No.132

小笠原諸島（東京都）

2022年度 ライフシフト交流会・奨学生成果発表会 …… 2
歴史研修「佐賀の城めぐり」 …… 4
美術研修「箱根の美術館」をたずねて …… 6
第38回 彫刻奨学生作品展 …… 8
プロフィール・インタビュー …… 12
日本大学 芸術学部 写真学科 准教授
穴吹 有希さん

いつでも　どこでも　だれでも学べる
公益財団法人北野生涯教育振興会
KITANO FOUNDATION OF LIFELONG INTEGRATED EDUCATION

懇親会の様子

2022年度
ライフシフト交流会・奨学生成果発表会

学ぶ姿勢が切り拓く人生の新たな可能性

ライフシフト交流会

2023年3月18日、渋谷エクセルホテル東急において、ライフシフト奨学生※による交流会が開催されました。コロナ禍も落ち着き、今回は奨学生22名（出席19名）が初めて一堂に会し、対面での開催となりました。

※ライフシフト奨学生とは、人生100年時代を迎えて、一度社会に出て働いている方々が、生涯を通じて必要な時に必要なことを学ぶため、大学や大学院修士課程、さらには博士学位まで見据えて真剣に研究に取り組み、自身のライフシフトを容易に出来る様に、2021年に北野財団で創設した奨学助成金制度です。

冒頭、北野七重専務理事より以下の挨拶がありました。

「近年、日本の研究能力に低下が見られ、その背景には経済的負担があると言われています。北野財団では奨学金により、高度人材輩出の一助になれないかとライフシフト奨学金を始めました。皆様には本日、様々なことを共有し、気付きを持ち帰って明日からの学びの活力が高まることを願っています。」

次に、奨学金選考委員長の青山学院大学、本庄陽子教授より以下の講演がありました。

「働きながら学ぶのは本当に大変なことです。そのような同じ境遇の方々が集う場所があるということは本当に心強く感じます。自分のための勉強が誰かのためになるのならそんな良いことはありません。ただハードルを上げすぎると疲れてしまいます。法律家を目指すなど明確な目標を持っている人、そうでない人がいますが、気にせず学びにより様々な出会いで道が開けます。目指す目標は遠くの頂でも気を付けなければいけないのは足元の小石。頑張りすぎずに頑張りましょう。」

その後、奨学生全員から自身の学びやその変化などを発表いただき、最後に懇親会となりました。懇親会では皆様、連絡先を交換するなど活発に交流され、予定時間を超過するほどの盛会ぶりでした。

挨拶する北野専務理事

講演する本庄教授

発表する和久井さん（立教大学）

成果発表会

2023年3月24日、科目等履修生（16名）、放送大学大学院修士全科生（11名）の奨学生による成果発表会をZoomにて開催しました。

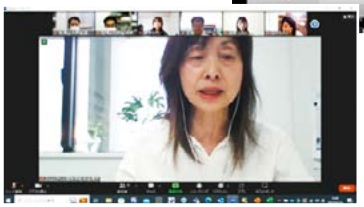
冒頭、城常務理事より北野財団の紹介と人生100年時代におけるリカレント、リスキリングによるキャリアアップ、チェンジの重要性についての説明がありました。後に、奨学生の皆様より各々の学びについてその成果を発表いただきました。

最後に奨学金選考委員長の青山学院大学、本庄教授より以下の総評をいただき、閉会となりました。

「学びというものはゴールがありません。社会人、家庭人としての役割、お金のやり繰りなど、考えなければならないことはたくさんありますが、長い目で見てやっていければいいと思います。」

成果発表の Zoom 画面

成果発表会
資料の一例



本庄教授による総評

第12回

50代から考える ライフプラン講座を開催

2023.2.18㈯

「50代から考えるライフプラン」講座を㈱活性化セミナー研究所の豊澤敏明氏と緒方逸郎氏を講師に迎え、渋谷エクセルホテル東急にて開催されました。コロナ禍も落ち着きを見せ、今回は久しぶりに昼食をはさんでの終日開催となりました。定員を超える申し込みがあり、セミナーは好評のうちに終了となりました。

セミナー風景

生きがいとライフプラン

人生100年時代、退職後の時間を短くするために、第二・第三の仕事をしていくライフシフトが求められます。

豊澤講師による講演

仕事をし続けるための努力が必要です。第二・第三の仕事は空から降ってくるわけではありません。「何をしたいか」「何ができるか」「何にこだわるか」を物差しに考えましょう。また、仕事を単に「賃金を得る」仕事から、誰かの役に立つ仕事「ライフワーク」へとシフト出来たら素晴らしいです。それには、人とのネットワーク作りが重要です。今から準備をしましょう。

「仕事」や「地域」といった社会的生活、「余暇」や「家族」の個人的生活などの充実度が「いきがい」となります。社会的生活の「働きがい」から個人的生活の「暮らしがい」へシフトしていきますが、どちらかをゼロにしないことが鍵となります。

その他、年金制度、税金についての解説がありました。

ありたい姿を描いてプランを作成

収入と支出（基本支出）について収支を計算し、長期家計プランを20年分作成します。

収入－支出＋貯蓄＝残高

この残高が使えるお金となります。「いくら使えるか」でライフプランを描いていくのです。やりたい事、ありたい姿を自由に描いていきます。そこで、そこにいくら使えるかで、できる、減らすなどメリハリをつけます。また、ありたい姿を実現するための具体策を書き出していきます。

参加者の皆様からは「可視化することで不安をどう解消するか分かった」「年金額や資産などを明確にすることが出来た」「基礎生活費の内訳が勉強になった」「資産運用や家計費の見直しをやってみる」とあり、それぞれ気付きがあったようです。

解説をする緒方講師

名護屋城址に咲く
満開の桜の前で

歴史研修

2023年
3月29日(水) ～ 30日(木)

財団のあゆみ 132

佐賀の城めぐり

コロナ禍のおり、4年ぶりの開催となりました今回の歴史研修は、佐賀県の唐津城、名護屋城、吉野ヶ里遺跡を探訪しました。満開の桜とお城の美しさに心奪われながら、学びを深める研修となりました。

解説
静岡大学名誉教授
小和田　哲男さん

唐津城

まず最初に一行が訪れた唐津城は豊臣秀吉の家臣、寺沢志摩守広高が慶長7年から7ヶ年の歳月をかけ、建てた城です。初代城主の寺沢志摩守広高は、秀吉から厚く信頼されていたため、名護屋城普請や朝鮮侵攻において、兵力輸送や食糧補給などの任務を担いました。

秀吉の信頼する家臣らが集められたこの地は一気に栄え、また、朝鮮侵攻の戦利品として腕の良い職人が多く連れてこられたことにより、工芸も発展しました。

唐津城の本丸跡は現在、舞鶴公園となり、唐津の歴史や魅力、唐津焼をはじめとした工芸品、宝剣や兜などを鑑賞することも可能です。

また、現在、城下町には唐津城を中心に数多くの石垣が残存しており、目にすることができます。

三方を海と川に囲まれた天守からの眺め

下から仰ぎ見る唐津城

唐津城へ続く石段の石垣

一井戸二楽三唐津

展示されている唐津焼は「一井戸二楽三唐津」という表現もあるほど珍重されており、今でも産業として成り立っています。発掘された物の中には唐津焼に絵を描いた「絵唐津」と呼ばれるものも展示されています。

名護屋城博物館

一行が名護屋城へ向かう前に訪れたのは、名護屋城博物館です。

こちらの博物館には、名護屋城図屏風の復元が展示されています。こちらは城の全景が描かれた非常に珍しい屏風で、天守も描かれています。当時、朝鮮出兵の際、将兵の基地になっていた場所で、城下町も栄えていました。

また、朝鮮には出兵せず、名護屋の留守を預かっていた大名達が能や仮装行列、芸能や和歌を楽しんだことが伺える遺品も数多く展示されていました。

茶道を楽しんでいた様子が伺える品も多くあり、黄金の茶室の復元も飾ってあります。

名護屋城と城下町のありさまや朝鮮出兵、その時代を生き抜いた人々の生活を示す資料が多くある博物館でした。

広大な名護屋城と城下町を復元した模型

名護屋城

博物館を観た後に一行が訪れた名護屋城は、豊臣秀吉が文禄・慶長の役の際、わずか5ヶ月で築いた城です。周辺には全国各地から集まった大名の陣屋が百五十以上も建てられ、中には徳川家康の陣屋、伊達政宗の陣屋などがあり、これだけ名だたる武将が会した城、城跡は他にありません。その中から朝鮮へ侵攻する武将もいれば、留守を任された武将もいました。

名護屋城を囲む石垣は豊臣秀吉の死後、江戸時代初期に破却されました。塀や櫓を建てさせないための破壊の手順が伝わる石垣は貴重な資料です。

くさびを使って割った痕が残る石を説明する小和田先生

小和田先生の解説を熱心に聴く参加者

城のかげ溜池に映る名護屋城の石垣と桜

朝鮮半島への侵略と名護屋城

豊臣秀吉が東アジア全域の支配を目指し、始めた朝鮮半島への侵攻。1592年（文禄元年）の開戦から秀吉の死で諸大名が撤退するまで、7年間、大陸侵攻の拠点だった場所が名護屋城です。

吉野ヶ里遺跡

2日目に訪れた吉野ヶ里遺跡は日本城郭協会の定める日本100名城に選定されています。それは、古代の城の代表例だからです。これまで弥生時代の城は目に見える形ではありませんでしたが、吉野ヶ里遺跡では発掘の成果として「櫓」や「主祭殿」が復元されています。他にも補強以外は発掘調査そのままの「堀」や推定復元された「塀」などがあります。弥生時代の城の復元整備が一番進んでいると言っても過言ではありません。

弥生時代から城が多く見られるようになった要因として、稲作が普及し、米を備蓄できるようになり、持つ者持たざる者の間で争いが始まったことが関係していると考えられています。争いから米や自分の村を守るため、城は発達していきました。吉野ヶ里遺跡はまさに、その走りです。

一行は、竪穴住居や床を高くし貯蔵していた米をネズミから守っていた高床倉庫、敵の侵入を防ぐための物見櫓、復元された外環壕と城柵、主祭殿などを見学しました。

重要な事柄を話し合ったとされる北内郭の主祭殿

王や長が集う様子を再現

環濠（かんごう）の周りに建てられた数多くの杭

500基からなる甕棺墓列（かめかんぼれつ）

復元された住居

物見櫓（ものみやぐら）から見える南内郭

財団のあゆみ 132

美術研修

2023年4月19日㈬
講師：美術研究家　沼辺 信一

「箱根の美術館」をたずねて

都心から一番近い観光地・箱根にあるポーラ美術館と彫刻の森美術館を日帰りで訪問し、箱根の自然と世界有数のコレクションを堪能しました。

1

3

2

5

4

ポーラ美術館

ポーラ美術館は、周囲の自然の景観に配慮して、建物の地上部分の高さを8mに抑えています。このため、建物の大半は円形の壕の中に収められており、入り口からエスカレータで地下に降りて行きます。

印象派の選りすぐりの作品が展示されています。ルノワールの「レースの帽子の少女」をはじめとした名作を間近に鑑賞しました。ルノワールは、人物画で知られていますが、「ロバに乗ったアラブ人たち」では、風景も大きく描かれています。

モネの代表作である「睡蓮」は、太鼓橋や対岸などを描いた奥行きのある表現から、やがて水面だけを描いたものへと作風の変遷について解説いただきました。また、「バラ色のボート」では船が画面からはみ出して切れている構図は、ジャポニスム（浮世絵の影響を受けている）では、とのお話もありました。

9

7

6

8

11

10

13

12

16

14

15

1ポーラ美術館の玄関で　2ピエール・オーギュスト・ルノワール「レースの帽子の少女」1891年　3ピエール・オーギュスト・ルノワール「ロバに乗ったアラブ人たち」1881/1882年頃　4クロード・モネ「睡蓮の池」1899年　5クロード・モネ「睡蓮」1907年　6クロード・モネ「バラ色のボート」1890年　7ジョルジュ・スーラ「グランカンの干潮」1885年　8「グランカンの干潮」に描かれた青色の額縁　9アンリ・マティス「リュート」1943年　10解説する沼辺信一氏　11樹木より低くするため円形壕の中にある建物　12八重桜とオシップ・ザツキン「住まい」1960年　13箱根の山並みを背にしたヘンリー・ムーア「横たわる像：アーチ状の足」1969-70年　14ニキ・ド・サン・ファール「ミス・ブラック・パワー」1968年　15彫刻の森美術館の「ピカソ館」　16彫刻の森美術館
上記2～9の所蔵元 ポーラ美術館蔵　上記12～15の所蔵元 彫刻の森美術館蔵

ポーラ美術館の収蔵品は、企画展ごとに名作を選りすぐって展示されています。今回見ることができなかった名作がまだ多くあります。また、彫刻の森美術館は、紅葉の時期には別の風景が見られると思います。機会があれば再び訪れるのも良いでしょう。

次回は、宿泊研修を企画してまいりますので、皆様ふるってご参加ください。

スーラの「グランカンの干潮」は、点描で描かれています。画面をよく見ると、点描による額縁に見立てた縁取りが施されているのも印象的でした。

企画展「部屋の見る夢」では、部屋にまつわる表現に特徴のあるマティス、ボナールや草間彌生など9組の作家の作品が展示されていました。

彫刻の森美術館

彫刻の森美術館は、1969年に開館した、日本で最初の野外展示の美術館です。箱根の山々や樹木などの自然が彫刻に彩りを添えます。日本庭園でいうところの借景です。八重桜とのコラボレーションは今の季節ならではの美術鑑賞でした。

野外展示の彫刻の維持は大変なようで、一部で修復作業が行われていました。付着した汚れや苔を落とすのは大変です。スタッフの努力があり、我々が気持ちよく鑑賞できるのです。

ピカソ館を併設していて、ピカソの絵画や陶芸品が展示されていました。ピカソは、一般に抽象派と思われていますが、キュビスムに分類されます。対象をそのまま描くのではなく、立体的に捉え、人の体を分解して、様々な方向から描いたものを組み立て描いたものと解説されました。写真の台頭により、それまでの写実的絵画が行き詰まりはじめ、キュビスムの方向へ向かったと言われています。

ピカソは、晩年に陶芸作品を多く作りました。可愛らしいものや、ピカソらしい絵柄など様々な作品が展示されていました。紙面で紹介できないのが残念です。

第38回 彫刻奨学生作品展

2022年11月29日～12月10日まで、日本大学芸術学部江古田キャンパス内で「第38回 彫刻奨学生作品展」が開催されました。奨学生5名の作品が中庭やギャラリー、資料館に展示され、多くの人々の目を楽しませました。また、奨学生の作品は3月に山梨県笛吹市「藤垈の滝 大窪いやしの杜公園」内に設置され、笛吹市のみなさんへ芸術鑑賞の機会を提供しています。公園内にはこれまでの作品91体も設置されており、大変見応えがあります。ぜひ足を延ばしてお立ち寄りください。なお、9月には公園内で「星空ミュージアム」が開催されます。ライトアップされた和傘と彫刻、そして満点の星空とお月様のコラボレーションをお楽しみください。

日本大学芸術学部 美術学科 中山 可琳さん

『ugly puzzle #3』

『nomadic list』

『filled membrane』

『あふれた』
設置後、最後の
仕上げを行う

絵画的な描写を作品にも取り入れたいと思っています。普段はモノクロの作品を造ることが多く、この作品は発泡スチロールに石粉粘土を何度も塗り直してどんどん重い作品になりました。人体をモチーフにしています。見えないオーラや雰囲気を自分なりに形にしてみました。粘土で作ったものを石膏で型取り、セメントを流し込んで造りました。表面にペンキをかなり塗っています。普段は柔らかい素材の作品を造っているので、公園に設置するために試行錯誤して造りました。この作品は四面に顔があります。お風呂に入っている自分と湯船から溢れるお湯をイメージしています。

日本大学大学院 芸術学研究科 北村 瑛芽さん

『クワズイモ』

ひときわ大きな
存在感

『MUSUBI』

観葉植物でよく見られる、食べられない『クワズイモ』をモチーフに作品を造りました。クワズイモは自然の中で育つと葉っぱが傘のように大きく育つので、「藤垈の滝 大窪いやしの杜公園」を下見した際に植物の生命感を強く感じて、葉っぱの大きなクワズイモにしました。公園に設置した際に気候による変化、例えば雨が降って雨水が上の葉っぱに溜まって、それが下に流れ落ちる様子をイメージして造りました。材質は火が通る一歩手前の大理石に分類されます。柔らかい材質で、よく磨いてもう少しツルツルにする予定です。

多摩美術大学大学院
美術研究科 彫刻学科
稲又 洸太さん

作品と一緒に

『days』

『2022.
7.18.10:28
笛吹市』

『Week』

ドリルで穴を開ける

大きな作品を造る人が多いので差別化を図るために小さな作品を展示してみました。元々、「空気を形にする」をテーマとして作品を造っています。焼き物の作品は、焼いた後に薬をかけてもう一度焼いています。今まではブロンズの作品を造ったことがなかったのですが、公園に設置するためにブロンズの作品に挑戦してみました。公園に設置する作品も「空気を形にする」がテーマなので、下見の際に空気をイメージして周りに馴染みつつも主張できる作品になればと思って色なども考えました。

女子美術大学大学院
美術研究科
大西 瑠菜さん

『静かな愛と』

ブルーグレーの
素敵な陰影

材質は
ジェスモナイト

『あなたと』　陶で造られた設置作品

顔をモチーフにした作品を造りはじめて、それは自分にとってどんな存在なのだろう、と考え落とし込んで、この作品を造りました。粘土で造ったものを石膏で型取って、ジェスモナイトという樹脂材質で造りました。それをエアガンで着彩しました。中はドーム状の空洞になっていて、それだけでは強度がないため、できた作品を一度切り離して内部に柱などを組んで、もう一度張り合わせています。公園に設置する作品は同じ顔のモチーフですが、材質はジェスモナイトではなく陶で造ります。

日本大学芸術学部
美術学科
LIU RUIQIさん

『Summer dream 2022/9/7』

ブロンズの作品
『夏の夢
2022/9/7』

『Sunflower
dream-3』

細部にまでこだわった彫り

『忘却の夢』

自分が実際に見た夢を日記に記録しておいて、それを作品にしています。元々、ひまわりが好きなので夢に出てくるのだと思います。夢の中で子どもから青年、おじいちゃんまで出て来たので、それを3作品にしました。木の作品のため細い部分は折れやすいので苦労しました。木を削って繊細な花びらや葉の薄い感じを表現しています。普段は木彫の作品を造っていますが、設置する作品はこれをブロンズで制作します。『忘却の夢』も実際に見た夢を表現しています。夢を作品にするのが面白いと感じているので、枕元には見た夢をすぐに記録できるように日記を置いています。

北野財団混声合唱団チャリティコンサート Vol.5

木を見ている 海を見ている

2023年3月12日（日）

2023年3月12日、当財団主催による「北野財団混声合唱団チャリティコンサートVol.5」が、めぐろパーシモンホール小ホールで開催されました。

このコンサートは当初、「フォーレのレクイエムを学び歌う会」の名称で「東日本大震災鎮魂コンサート」として始まり、5年を経て2018年からは現在の名称に改称し、ただ歌うだけでなく幅広い教養と経験を得られるよう、結団式では講師による講義を行い、コンサートでは様々な楽曲に取り組んでいます。

コロナ禍により2020年のコンサート目前に中止となり、大変悔しい思いをしましたが、2021年は感染対策をしっかり行いながら練習し、2022年3月に無観客ながら3年ぶりのコンサートを開催することができました。そして今回、人数を減らしたものの4年ぶりに有観客でコンサートを行うことができました。

公募により集まった総勢60名の合唱団員が半年間かけて練習に励み、ドイツ民謡をドイツ語のアカペラや日本語訳で素晴らしいハーモニーを奏でました。また、2020年に演奏することが叶わなかったクラリネットとピアノのための「東北地方民謡コンポジション」は、誰もが知っている民謡がとてもお洒落な楽曲に生まれ変わりました。同じく歌うことが叶わなかった「富山に伝わる民謡」にもクラリネットが加わり、力強く歌いあげました。2部では宗教曲の名曲を原詩で気持ちを込めて奏でました。そして、加藤昌則作曲／たかはしけいすけ作詞の委嘱作品「木を見ている 海を見ている」の全2曲を初演することができました。本来は昨年初演の予定でしたが、コロナ禍で練習がかなり制限され、残念ながら1曲のみの演奏となりました。今回やっと2曲揃って初演できたことに大変大きな喜びを感じました。コンサートの最後には「花は咲く」を出演者全員、そして来場者は心の中で歌い、大きな拍手で会場がひとつになりました。

半年間の合唱指導と本日の指揮をしてくださった竹内雅挙さんと荒牧小百合さん

コロナ禍のおり、マスクを付けての歌唱となりましたが、どんなときも、どんな困難なことが起きようとも、学ぶこと、学び続けることの大切さを感じることができるコンサートとなりました。来場者からも「とても素晴らしかった」とお声をいただきました。来年のコンサートは満員の来場者の前で素敵なハーモニーをお届けできることを願っております。

なお、コンサートによるチケット収入は、当財団より宮城県気仙沼市へ復興支援（生涯教育の振興）に役立てていただくよう寄附いたしました。

「東北地方民謡コンポジション」を演奏する中山博之さんと大成雅志さん

「木を見ている 海を見ている」を手掛けてくださった加藤昌則さんとたかはしけいすけさん

Program

第１部

ゆけわがそよ風
F. メンデルスゾーン作曲 /H. ハイネ作詞 / 三浦和夫訳詞

深い谷間で
ドイツ民謡 / ブラームス編曲

歌声ひびく野に山に（麗しき春よ）
ドイツ民謡 / 丹治汪訳詞 / 前田憲男編曲

クラリネットとピアノのための「東北地方民謡コンポジション」
中山博之作・編曲（編曲委嘱作品・初演）

越中おわら・こきりこ
「富山に伝わる３つの民謡」より　岩河三郎作詞構成・作曲

第２部

アヴェ・マリア　J. アルカデルト作曲

アヴェ・ヴェルム・コルプス　W.A. モーツァルト作曲

おお聖なるかな「12 の各国の歌 WoO157」より

第 4 曲（シチリア）　L.v. ベートーヴェン作曲

パニス・アンジェリクス（天使の糧）　C. フランク作曲

Ⅰ. 木 disassociation
Ⅱ. ただそれだけ (un)conscious
加藤昌則作曲 / たかはしけいすけ作詞（委嘱作品・全曲初演）

混声合唱とピアノのための
《木を見ている 海を見ている》

花は咲く
菅野よう子作曲 / 岩井俊二作詞 /
山田香編曲（編曲委嘱作品）

財団ニュース

ご報告

2023年度 音楽奨学生奨学金授与式

2023年4月5日、愛知県立芸術大学において、第15回音楽奨学生奨学金授与式が、入学式終了後の音楽学部新入生ガイダンス会場で行われました。

この奨学金制度は、当財団が芸術振興の一助として、同大学の学生を対象として2009年より実施しています。多くの学生の中から奨学生に選ばれた優秀な3名に、城 真二常務理事から奨学金が授与されました。奨学生たちは、選ばれた喜びとこれからの抱負を熱く語りました。今回の3名を加えると奨学生は46名になりました。奨学生のみなさんは海外に留学されたり、卒業後はオーケストラに入団されたり、後進の指導をされたりと各方面でご活躍されています。

奨学生のみなさん

小坂 千尋さん（声楽）

稲垣 みなみさん（ピアノ）

稲田 悠佑さん（チェロ）

お知らせ

伝承研修 偉人のふるさとをたずねて「会津編」

戊辰戦争時、白虎隊悲劇の舞台となった飯盛山、子どもたちへの教育を熱心に行った会津藩校日新館などを辿りながら会津の歴史を学びます。赤べこの絵付け体験や年に一度行われる大内宿の一斉放水を見学します。

日程 2023年8月31日(木)～9月1日(金)

定員 40名

遠い昔にタイムスリップしたような大内宿

デジタル一眼レフカメラ講座

デジタル一眼レフカメラ講座です。講義・撮影実習・作品投影と講評・懇親夕食会など盛りだくさんな内容です。素敵な瞬間を写してみませんか。後日、中目黒GTギャラリーで作品展を開催します。

一瞬を切り取る

日程 9月5日(火)～6日(水)

会場 ニューウェルシティ湯河原（撮影は湯河原・熱海周辺）

定員 20名

歴史研修 丹波・播磨の城めぐり

戦国武将 明智光秀ゆかりの城、福知山城と、篠山（ささやま）城、そして平成5年に日本で初めて世界文化遺産に登録された白壁が美しい姫路城を、歴史研究家 小和田哲男氏と共に巡ります。

日程 9月27日(水)～28日(木)

講師 小和田 哲男氏

定員 40名

白壁が美しい姫路城

こ●ち●ら●編集室

この3月に歴史研修「佐賀の城めぐり」を開催することができました。じつに4年ぶりの泊りがけでの研修です。参加者の明るい笑顔に触れることができ、大変うれしく存じます。やっと日常が戻ってまいりました。これからも財団は、みなさまが安心して参加できる様々な研修会、講演会を企画し、学べる機会を提供してまいります。

設立のねらい

当財団は、スタンレー電気株式会社の創業者北野隆春の私財提供により、生涯教育の振興をはかる目的で1975年6月23日、文部省（現文部科学省）の認可を得て発足し、2010年12月1日に公益財団法人となりました。当財団は、いつでもどこでもだれでも学べる機会をつくり、学ぼうとする方々に対し、より豊かな生きがいを持てるよう、時代が求める諸事業を展開してまいります。

表紙ギャラリー

当財団は、『出会いはドラマ、感動する心を大切に』というスローガンのもと、出会いを大切にし、様々な学ぶ機会を提供してきました。人との出会いだけではなく、城や神社仏閣などの歴史的建造物や長い歴史に育まれた美しい原風景との出会いからも学ぶことは多いのではないかと考え、『世界遺産』を財団機関紙でご紹介します。

小笠原諸島（東京都）

小笠原諸島は、東京都心から南に約1,000kmの太平洋にある島々の総称です。島の誕生以来、一度も大陸と陸続きになったことが無く、生きものは島独自の進化を遂げました。そのため固有種が数多く生息しています。その「生態系（小さな海洋島における生きものの進化を示す典型的な見本として、世界的な価値を持つこと）」が認められ、2011年6月に日本で4番目の世界自然遺産として登録されました。特に陸産貝類（カタツムリの仲間）や植物において、進化の過程がわかる貴重な証拠が残されていることが高く評価されています。

小笠原諸島の中で、世界遺産の区域となっている島は、北から聟島列島、父島列島、母島列島、火山（硫黄）列島のうち北硫黄島と南硫黄島、西之島です。父島・母島では、集落地などを除いた陸域と、一部周辺の海域が世界遺産の区域となっています。

小笠原の深い紺碧の海には、色鮮やかな熱帯魚が泳ぎ回り、島の周辺にはイルカやクジラが群れを成して生息しています。また、日本最大のアオウミガメの産卵地となっています。

小笠原には空港がなく、訪れるには定期船の「おがさわら丸」で24時間かけての長い船旅ですが、他では見ることのできない唯一無二の独自の進化を遂げた生きものや美しい大自然を満喫しに、訪れてみてはいかがでしょうか。この素晴らしい世界自然遺産を後世まで守っていきましょう。

写真提供:小笠原村観光局

生涯教育だより 第132号

2023年7月10日発行
編集人　城　真二
発行人　北野　重子
発行所　公益財団法人　北野生涯教育振興会
〒153-0053　東京都目黒区五本木1丁目12番16号
電話　東京　03（3711）1111

日本大学
芸術学部 写真学科 准教授
穴吹 有希さん
YUKI ANABUKI

生涯教育を意識することで人生がもっと豊かになる

当財団が主催する「デジタル一眼レフカメラ講座」の講師を務めていただいている穴吹さん。ご自身の経歴をもとに、生涯教育に対するお考えをお話しいただきました。

サイエンスフォトでは
特殊な機材で撮影する

日本画の技法を
取り入れた写真作品

―穴吹先生のご経歴と、主な研究内容をお教えください。

写真家である父のもとで育ち、幼い頃からカメラは身近な存在でした。父の影響を受け、中学生の頃に本格的にカメラを始めると、専門的な撮影技術を学ぶため日本大学芸術学部の写真学科に進学。卒業後はカメラマンとして出版社に勤めました。子どものころから教育現場に携わりたいという思いもあったため、出版社を退社後は母校の写真学科の助手に着任。現在は准教授として写真の基礎教育に注力するほか、顕微鏡や天体望遠鏡など特殊な機材を使用したサイエンスフォトという科目を担当しています。

研究内容としては、主に「写真と他分野の表現技法との融合」に挑戦しています。最近では、典具帖紙と呼ばれる薄い和紙に写真をプリントし、その裏から金箔や銀箔などの金属箔を貼る「裏箔」と呼ばれる日本画独特の技法を取り入れて作品を作るなど、写真表現の幅を広げる取り組みを行っています。

―北野財団が主催する、「デジタル一眼レフカメラ講座」の講師を引き受けてくださった経緯についてお教えください。

デジタル一眼レフカメラ講座はもともと別の教員が担当する予定だったのですが、その方が急遽海外研修に行くことになり、私が代わりに講師を引き受けることになりました。学生に向けて授業を行うことはありますが、学外の方を対象に講座を開く機会はその当時経験が少なく、第一回から講師として参加する中で、私自身多くの学びがありました。その一つに、受講者の方との接し方があります。デジタル一眼レフカメラ講座に参加される方は、年代もバラバラですし、それぞれが持つカメラの技術や経験も異なります。その中で誰もが楽しく受講いただくためには、受講者の方の状況を把握し、全員にアプローチすることが大切です。講座の講師を通して、普段学生に教えるときもそのことをより一層意識するようになりました。

コロナ禍でここ数年は講座を開くことができていなかったのですが、今年は数年ぶりの開催が決まりました。参加者の皆さんと久しぶりにお会いできるのが待ち遠しいですね。

―生涯教育のお考え方をお聞かせください。

生涯教育は、ほとんどの方が何気なく行っているものだと思います。そしてふと振り返ってみると、様々な経験が自分の糧になっていたと気付くのです。私も生涯教育という言葉を意識したのはここ最近のこと。きっかけは娘の誕生でした。3歳になる娘にこれからどのような経験をさせてあげられるのかと考えたとき、自分から意識的に取り組ませることが重要だと考えたのです。人生の時間は有限です。限りある時間で何をするのか、何をしたいのか。若い時にそれを意識できると、より有意義な時間を過ごせるのではないかと思います。

―ご趣味、余暇の過ごし方をお教えください。

大学に入ってすぐ、友人がやっていたアーチェリーに惹かれ、社会人に混じってアーチェリーを始めました。それからアーチェリーにのめり込み、今となっては私の人生に欠かせないものの一つになりました。また偶然にも練習場でパラリンピックに出場するような有名な選手たちと出会い、一緒に練習したり、大会に出場したりするなど、彼らと活動できたことは私にとっての財産です。様々な年代の方や、中にはハンデを持った方がいる中で、いろいろな人の経験や考えを肌で感じることができました。アーチェリーは小さい子からお年寄りの方までプレーできるので、生涯教育にも通ずる部分があると思います。

アーチェリーでは全国大会で入賞した
ご経験も

―読者へのメッセージをお願いします。

生涯教育を意識して何かに取り組むということは非常に大切です。生きることや働くことなど、何事も意欲的に取り組むことで心健やかに生活することができるはずです。その選択肢の一つとして、デジタル一眼レフカメラ講座に興味がある方、参加することを迷っている方は、ぜひお気軽にご参加ください。カメラができる人も、できない人も一緒に楽しめる講座にしていきます。皆さんのご応募をお待ちしています。

「デジタル一眼レフカメラ講座」は、穴吹先生の生徒に寄り添ったご指導が好評で、リピーターも多い人気の講座です。次回は9月、湯河原・熱海周辺で開講予定です。ご興味のある方はぜひ！